

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	高橋 美由紀
論文題目	シンガポール華人社会における児童とその母親にみる言語環境の動態の研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は東南アジアのシンガポールの言語政策の変遷と影響について考察している。シンガポールは人口の 77% が華人、14% がマレー人、8% がインド系、残り 1% が「その他」の多民族国家である。国語はマレー語で、公用語はマレー語に加えて、華語 (標準中国語)、タミール語、英語が採用されている。政府は国民統合、経済発展、安全保障などへの配慮から、言語政策に力を注いできた。政府はどのような言語政策を展開してきたのか、その政策が華人社会にどのような影響を与えたのか。</p> <p>本研究の主たる対象は、シンガポール国民の多数を占める華人である。興味深いことに、華人の母語である華語方言は公用語にも国語にもなっていない。国勢調査によれば、華人家庭で使用される言語は、1957 年から 2000 年の間に、華語方言は 98.7% から 30.7% へ減少し、華語は 0.1% から 45.1% へ、英語は 0.2% から 23.9% へと増加した。この変化の主因は、華語と英語を重視した学校教育、そうした教育を受けた世代への交代にある。本論文は、華人社会のなかでも、家庭内で英語を用いる学歴エリート女性に焦点をあてて、言語政策への対応について考察している。</p> <p>序章で調査方法、先行研究の紹介、本論文の構成などの概要を述べた後、第 1 章では、シンガポールの華人社会で使用される言語について概観が提示されている。その移り変わりや現状、学歴や居住形態との関係が示される。</p> <p>第 2 章では、シンガポールにおける言語政策の変遷が説明される。最初は 1965 年の独立後に採用された英語重視政策である。その背景には、政府指導者が華人社会の中の英語エリートであり国内の華語派野党勢力に対抗する必要があったこと、経済的な効用が大きいこと、マレーシアやインドネシアといったマレー人国家に囲まれていたため華語を前面に出して反発を招くのを避ける必要があったことといった要因があった。第二は華人社会の一体感を醸成するための華語の使用を推進するスピーク・マンダリン・キャンペーンの時代である。1979 年に始まった。主たる対象は華語方言を用いる世代であった。第三は学校で英語教育を受けた世代に第二言語として華語の学習を奨励するバイリンガル重視政策である。</p>			

第3章では、シンガポールのアンモキオ地区での調査結果に基づいて、教育熱心な英語家庭の母親が子供に与えている言語教育、とりわけ就学前教育と初等教育の現状を説明し、英語と華語のバイリンガル教育がシンガポールの言語政策展開においてどのような意味を持つのかを考察している。

第4章では、シンガポール社会における女性の社会的な地位や役割について概観した後、家庭では女性が子供の教育について主導権を握っていることを指摘し、母親が子供の教育に費用や時間を惜しまず極めて熱心に取り組んでいることを、3名の具体的事例の詳細な叙述に基づいて、明らかにしている。

第5章では、まず、アンモキオ地区で350名の母親たちを対象として実施した聞き取り調査に基づいて、彼女たちの年齢、子供たちの年齢、彼女たちが就学した学校の英語学校と華語学校の別、実家の祖父母や両親との会話で用いる言語、子供たちとの会話で用いる言語、市場や食堂といった場面ごとの言語の使い分け、といった情報を整理紹介している。続いて、3名の母親の詳細な事例研究から、英語しかできない母親と、英語と華語の両方ができる母親を対比しつつ、家庭における子供の華語教育への取り組みを描いている。

第6章では、本研究での発見や議論を要約して、政府の言語政策が成功を収めてきたように見えるものの、華人社会の住民は政府とは異なる思惑で言語学習に取り組んできたことを指摘する。具体的には、母親たちが言語政策に優等生的に対応しているように見受けられるのは、国民統合や華人アイデンティティ確立といった政府の思惑とは異なり、英語と並んで華語の成績がよくなければ学歴エリート仲間入りをさせられないからである。

(論文審査の結果の要旨)

シンガポールは華人が人口の4分の3を占めている。これら華人の母語は、植民地時代以来、祖先の出身地によって福建語、広東語、潮州語といった華語方言に分かれていた。しかし、1965年の独立を経て今日では、華語方言を用いる人々に代わって、華語(標準中国語)や英語を用いる人々が増えてきている。これは、政府がマレー語を国語、マレー語、華語、タミール語、英語を公用語と定め、学校において英語教育、あるいは英語と華語のバイリンガル教育を重視してきた言語政策に負うところが大きい。本論文は、華人の使用言語が華語方言から、英語ないし華語へ変化する過程や仕組みの実証的な解明を試みている。

本論文は以下の点において高く評価しうる。

第一は、研究の手法である。シンガポールの言語政策については、政策の変遷や教育制度に着目する研究がこれまで少なからず行われてきた。しかしながら、政策や教育の対象となる国民の側については研究が手薄であった。本論文は言語学習の当事者である子供を抱える母親、特に家庭内の会話に英語を用いる高学歴の母親に焦点を絞りつつ、フィールド・ワークに基づいて実証的に解明を目指した。聞き取りや住み込みといった調査方法を用いたからこそ、子供の教育とりわけ言語教育に滑稽とすら思われるほど熱を入れる母親の姿を生き生きと描きだすことに成功している。

第二に、言語政策と受け手の間の動態的な関係を明解に説明している。政府は独立当初には、華語方言しか話せない華人に英語を学ぶように求めた。しかし1979年以後は、華語も話せるようになることを要求するようになった。そして華語方言は理解できず、学校で学んだ英語をもっぱら用いる世代が親になると、その子供世代に華語も学ぶように要求した。家庭で英語しか使わない華人にとって華語の学習は容易ではない。しかしながら、学歴エリートになるためには必修科目の華語でも優秀な成績を修めなければならない。自らが学歴エリートである英語を用いる母親たちは、子供の華語教育に幼少時から熱を入れる。

第三に、そうした優等生的対応の背景にあるのは、学歴エリートによる支配を正当化する説明原理である学力至上主義であることを指摘し、熾烈な学力競争が幼稚園や小学校からすでに始まることを実証的に示している。政府は華人アイデンティティの強化やアジア的価値の促進を念頭に華語学習を推進しているが、母親たちは華語を子供がよい成績を得るためのハードルのひとつとして認識し、子供が大学に入学したあとは、華語教育への熱が冷めるという皮肉な状況が描き出されている。

第四に、高学歴で、安定した職を得て、家庭では家事使用人を雇用することも可能な母親たちが、子供が小さいうちは仕事を続けるが、就学期になると仕事を辞めて家庭に入り、子供の教育に専念するようになるといういささか奇妙な現象を発見し、その理由を考察している。日常の家事や介護は家事使用人に任せても、子供の教育に関しては母親が主導権を握るのはなぜか。これには、女性が家庭に入ることを好ましいとする政府の性別役割イデオロギー、子供の教育は母親の責任であるという社会通念、さらに母親自身の次のような事情が影響を与えていると指摘する。すなわち母親は高学歴であるがゆえに、子供の教育への関心が高く、子供の勉強の世話をやるだけの能力があり、仕事を辞めても生活しうるだけの所得が配偶者にあるといった事情である。

シンガポールにおける言語政策と華人家庭における対応を実証的に解明しようとした本論文は、東南アジア地域研究の発展に大いに寄与しうると判断される。

よって、本論文は博士(地域研究)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 21 年 1 月 7 日に、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降